



Part 1

二度目の病院機能評価

—馬場記念病院の5年間を振り返って—

Part 2

地域医療に取り組む診療所

病院機能評価の認定更新への取り組みが、 馬場記念病院に教えてくれたもの。

平成16年2月、馬場記念病院は日本病院機能評価機構による病院機能評価を受審し、
いくらかの紆余曲折を経て、平成17年5月に正式な認定更新を受けました。

今回の病院機能評価に関していえば、
馬場記念病院は認定更新という結果以上の
大切な気づきを得たといえるでしょう。

その気づきとは何か？

まずは平成11年の最初の認定取得から
話をはじめることにしましょう。



「つばさ」で病院機能評価を取り上げるのは、これで二回目になる。最初は平成11年発行の「つばさ第5号」。このとき馬場記念病院は初めて病院機能評価を受審し、認定を受けた。そして今回、「つばさ第20号」では、認定の更新について報告する。病院機能評価は5年ごとに審査を受け、認定を更新していくことが義務づけられているのだ。「病院機能評価とは何か」の詳細はコラムに譲るとして、まずは平成11年の一回目の病院機能評価受審を振り返ってみたい。

「とにかくタイヘンだった」 一回目の病院機能評価

5、6年といった歳月は短いようで長く、一回目の病院機能評価の受審について話を聞いても、多くの職員の記憶はあいまいだ。そこで今回は、ベテラン職員数名に集まってもらい、話を聞くことにした。井戸端会議のように思い出を語り合えば、記憶が記憶を呼び起こし、より明快な話が聞けるかもしれないから。

「とにかくあの時はタイヘンだったねえ。全員が『ベガサスの約束』（医療法人ベガサスの理念）を正しく理解しているようにしていた

もの」

「部門ごとの理念もはっきりしていなかったから、改めて明文化したり」

「患者さまからのご意見を受け付ける『ご意見箱』の設置はもつと以前からだったけど、最初は病院中に置いたから、ご意見用紙を回収するのがすごくたいへんだったのよ」

「病院全体がひとつになって、大きな目標に向かって活動したのは、あの時が初めてだったかもしれないね」

その席はまるで同窓会のような雰囲気になり、思い出話が次から次へとわきあがってきた。懐かしそうに話すメンバーの口ぶりからは、当時の苦労がしのべれた。それは学生時代のクラブ活動や大



なイベントを語り合う口調にも似ていた。

「CQI（継続的な質の改善）」 というキーワード

思い出話がひとしきり終わった頃、この席に集まってくれたメンバーの一人である魚野弘子（検査部次長）が口を開いた。

「認定を受けたと聞いたとき、私が真つ先に思ったのは、『この状態で認定を受けてしまつて大丈夫なのか』ということだったんです。確かに病院機能評価の認定は得たけれど、けつして百点満点で受かつたわけじゃない。認定取得病院という看板と現実とのギャップを埋めていくために、今後がタイヘンだつて」

当時の資料をひもといてみれば、魚野の感想は、けつして彼女一人のものではなかつたことがわかる。理事長の馬場武彦は病院機能評価を受審するにあたり、こんな言葉を残している。

「現在の私たちにとっては認定証を得ることが目的ではなく、評価そのものを受けることが目的なのである。これを機会に改善のきっかけをつくつてほしい」

今思えば、馬場記念病院にとつ

て、一回目の病院機能評価の受審はかなり背伸びをしたものだった。「改善しなければならぬことがたくさんある」という多くの職員の気持ちをひとつにし、一気に行動に移すためのきっかけにしたいという願いが込められていた。願いは叶つた。認定を取得できただけでなく、多くの職員の間に「やれどできる」という自信が芽生えていた。同時に「まだまだ改善が足りない。もつとできる」という意欲も生まれていた。認定を受けた

という事実よりもむしろ、大切なのはこの自信と意欲を生かし、改善を継続していくことだった。

今、医療界で注目されている言葉のひとつに、CQIというのがある。これはContinuous Quality Improvementの略。つまり「継続的な質の改善」を目的として、組織内で行われる活動に対して摘要される管理論であり、管理手法である。一回目の認定取得から今回の認定更新にかけての5、6年を見つめ直すとき、この「CQI（継続的な質の改善）」

がひとつのキーワードになるかもしれない。

プロジェクト活動や 職員研修などの定着

一回目の認定取得後、馬場記念病院では次なる改善に向けてさつそくいくつかの手が打たれている。「診療の質の確保チーム」「診療情報管理チーム」など、いくつかのプロジェクトが立ち上げられ、部門の壁を超えた改善への取



り組みがスタートした。こうしたプロジェクトは必要に応じて組織され、現在、プロジェクト・委員会の数は30を超えるまでになっている。

また患者さまへのサービスを向上させるために、接遇研修を開催するようになった。ホテルニューオータニから講師を招き、ホテルの本格的なサービスを吸収した。こうした接遇研修は現在に至るまで続けられ、職員のマナー向上に役買っている。当時と異なる点といえば、ホテルから招いていた講師に代わり、馬場記念病院の職員が講師を務めるようになったことくらいだろうか。

定期的に行われるようになった研修は、接遇ばかりではない。全職員が参加して毎年開催される「医療法人ペガサス全体研修」や管理職を対象とした「管理職研修」、医療界の現状について医師が学ぶ「医師院内研修」などが根づいているほか、部門ごと・専門領域ごとの研修会もひんばんに開催されるようになった。また、こうした動きは病院外にも広がり、地域の診療所の医師などを対象とした「馬場記念病院勉強会」、地域の福祉事業者などを対象とした「地域医療・介護研修会」、一般の方を対象とした「ペガサスセミナー」などが定着した。

こうした研修の様子をベテラン職員の一人である本高多美子（ペガサスケアプランセンター忠岡管理者）はこう話してくれた。

「研修が開かれると聞けば、多くの職員が積極的に参加するようになったし、職員から研修の開催を発案することも多くなったように思います。また、職員自身がさまざまな研修の講師役として舞台に立つようになったことも、大きな違いかもしれません」

そして今回の認定更新 約1年前からの準備スタート

さて、時計の針を一気に進めて、今回の認定更新の話題に移ろう。馬場記念病院では、認定更新の約1年前に機能評価準備委員会を立ち上げ、準備に取りかかった。今回は新規の認定取得ではなく、更新である。しかし、けっして油断することはできないと考えての早めの対応だった。

病院機能評価は、時代の変化に合わせて常に評価項目を見直し続けている。そのため今回の評価項目は、一回目の受審時と比べ、質量の両面でかなりハードルの高いものとなっていたからだ。単純に量

病院機能評価とは何か

中立的・学術的な団体が行う 第三者による評価です

病院機能評価とは、財団法人日本医療機能評価機構という団体が行う第三者による病院評価のこと。専門知識が豊富なサーベイヤ（評価調査者）により、病院の機能を中立的・学術的に評価すると同時に、改善すべきポイントを具体的に示します。

評価は五年ごとに行われ、継続的な改善を求めます。また、意欲的に改善に取り組む、その成果が得られた病院には、認定証が発行され、機構のホームページ等で公表されます。

一般の方にとっては 病院選びの指針でもあります

実は、この病院機能評価が登場するまで、医療の世界には病院の内容を評

価する客観的な情報がほとんど存在しませんでした。しかし現在、一般の方は病院機能評価の情報を参考にして、病院を選ぶことが可能になりました。

認定を受けている病院なら、「安心して診てもらえる病院だ」と判断できるからです。

こうした動きには、病院側も敏感に反応し、現在では、実に多くの病院が認定を取得しています。馬場記念病院が最初に病院機能評価を受審したとき、全国で175番目の認定取得でした。それが今、「日本医療機能評価機構」のホームページを見れば、1663もの病院が認定を取得していることがわかります（平成17年6月20日現在）。わずか五年ほどで10倍。確かに病院機能評価は日本の医療界に定着しつつあるといえます。

近年の社会や医療界で特に注目されている点、課題となっている点と重なる。

たとえば診療の手順や 設備の管理を明文化すること

機能評価準備委員会には、全体



を統括する「事務局」のもと、「診療部」「看護部」「医療技術部・地域医療部」「事務部」の4ユニットが設置され、各ユニットの下には多数のグループが置かれた。委員会のメンバーは総勢47名におよび、彼らが中心となって、全職員が参加する形で準備は進められていった。

「準備は順調だったと思います」と話してくれたのは、事務部長であり、準備委員会の事務局長を務めた田中恭子。

「できる限りの情報を早めに集め、各ユニットに大まかな方針を伝えると、メンバーは自発的に動いてくれました」

たとえば診療部ユニット。麻酔科部長の池田栄浩医師は、問題点洗い出しの結果、「麻酔科としての診療の質を確保するために、方針や手順、設備の管理方法の明文化などが必要」と考えた。そして「年間1300例を扱う麻酔科として、スタッフの勤務体制をどのように整備しているか」「患者さまに対する麻酔の説明では、どんな項目をどんな手順で話すか」「手術室や麻酔の設備の点検は、どれほどの頻度で行うか」といった項目を丁寧に文書にまとめていった。

「当たり前前と思っていた業務を

改めて見直し、システムとして形を整えるためのよいきっかけになったと思います。スタッフとも話し、方針や手順を確認することもできましたね」

池田医師は、病院機能評価への取り組みをこのように自己評価する。もちろん、こうした活動はすべての診療科で行われた。細部に違いはあるにせよ、「ふだん行っている業務を改めてシステム化・明文化した」という点で、各診療科の活動は共通のものだった。

「今回、新しいことはほとんどしていない」

診療部と同様の準備活動は、各

ユニットで積極的に行われた。看護部ユニットでは、急性期看護・慢性期看護・外来看護・手術室看護の各領域で現状の見直しを行い、必要な改善に取り組んだ。しかし、手術室看護領域の担当者である三野直人看護師（看護部副部長、手術室師長）は、「病院機能評価を受けるために特別何かしたということはない」と言う。

「私たちは、患者さまが安全に安心して手術に臨むことができるよう、手術室入室退室、器械器具滅菌など、現在使用している基準手順にそって看護しています。今回、サーパーバイヤー（審査官）の方より基準手順の改正の必要性の指摘はなく、現状で良いとの評価をいた

できました。常日頃より現状の見直しを行っている成果だと受け止めています。今後、手術室看護がさらに前進するよう、常に問題意識を持ち見直していきたいと思えます」

「CQI（継続的な質の改善）」はしっかりと根つきはじめていた

こうして何人かの職員に話を聞いてみると、それぞれの話には大きな共通点があるのに気づく。誰もが、「新しいことはそれほどしていない。これまで積み重ねてきたことを見つめ直し、まとめ直しただけ」と話してくれたのだ。

一回目の病院機能評価のあと、

現在に至るまで、確かに改善は継続されてきたようだ。今回の認定更新に關してのキーワードとして挙げた「CQI（継続的な質の改善）」は、馬場記念病院にしっかりと根つきはじめていたといっている。

こうして進められた準備の結果は、分厚い書類として事務局長の田中のもとに集められた。時間をかけて書類を確認した田中は、「どの書類も予想以上にしっかりと的確にまとめられていたので、正直、少し安心しました」と振り返る。こんな言葉からも、順調に準備が進められたことがうかがえる。

数々の認定取得にともなう多くの改善の重なり合い

「CQI（継続的な質の改善）」に関連して、もう一つ取り上げておきたいことがある。一回目の病院機能評価のあと、馬場記念病院が取得してきた「地域医療支援病院」「臨床研修指定病院」「急性期特定病院」という認定についてである。これらは、いずれもハードルはきわめて高いものだったが、馬場記念病院は大阪府下でも先陣を切る形で各認定を取得してきた。そして、各認定を取得するためのさまざまな活動





もまた、「CQI（継続的な質の改善）」の一翼を担っているように思われる。

たとえば「地域医療支援病院」の認定取得のためには、地域の医療機関との連携を深め、地域全体でより良い医療を提供するための体制づくりを確立してきた。

「臨床研修指定病院」の認定取得のためには、若い医師が研修を積み、医療現場での実務を習得するのにふさわしい医療の質や倫理観、研修医への指導体制を確立するための努力を重ねてきた。

また「急性期特定病院」の認定取得のためには、診療所からの患者紹介率30%以上、平均在院日数17日以内、入院と外来患者の比率が1対1.5以下をはじめ、高度な急性期入院治療を行う病院としての体制構築に力を注いだ。

こうした取り組みがすべて、病院機能評価の評価項目に直結しているわけではない。しかし、めざす方向が異なっているわけでもない。だからこそ、こうした取り組みのひとつひとつが「CQI（継続的な質の改善）」として重なり合い、結果的に病院機能評価の認定更新のための準備として結実してきたとはいえないか。





訪問審査を終えたあとの自信 そして、3カ月後に届いた結果

いよいよ病院機能評価の認定更新である。サーベイヤーによる訪問審査は、平成16年2月12日～2月14日の三日間にわたって行われた。

ここまでに紹介してきたように、馬場記念病院では十分な準備を整え、直前には訪問審査のリハーサルも行っていった。当日、サーベイヤーは各職場へ足を運び、職員にさまざまな質問もした。多くの職員は「きちんと対応できた」と手応えを感じていた。5年以上にわたって行ってきた「CQI（継続的な質の改善）」は実



を結んだように見えた。少なくとも、一回目の病院機能評価受審後よりも、職員の表情は自信に満ちているように感じられた。

しかし約3カ月後に届いた結果は、「二年間限定の認定」というものだった。つまり「病院機能の多くは高く評価できるが、一部に改善を要する点がある。一年間限定の認定を与えるので、その間に改善を期待したい」ということだ。

この結果を手にした事務局長の田中は、一瞬、目を疑った。そして「そうか……」とつぶやいた。今回の病院機能評価では、一回目よりもさらに厳しい視線にさらされることはわかっていった。だからこそ、早い段階から準備を進め、万全を期してきた。しかし、評価のハードルは予想以上に高いものだった。「万全のつもりで準備に取り組んだけれど、やはりどこかに少し油断や甘さがあった」（田中）のである。

最後に残った問題は 「薬剤師の当直業務」

改善を要する点として指摘されたのは、以下の通りである。

患者さまのプライバシー確保に関する問題が二点。
カルテ管理に関する問題が一点。

地域医療支援病院・臨床研修指定病院・ 急性期特定病院とは

地域医療支援病院

地域医療支援病院は、地域医療全体の質の向上と、各医療機関との連携による地域完結型医療の推進をリードする役割を担う病院のこと。地域医療支援病院と地域の病院・診療所等が協力して形づくる医療ネットワークは、より良い医療を、より効率的に提供するための新しい医療提供の仕組みとして、大きな期待を集めています。

臨床研修指定病院

医学部を卒業し、国家試験に合

急性期特定病院

格した医師が、実践の場として研修を積むための病院のこと。臨床研修指定病院としての指定を受けるためには、高い医療の質と倫理観を保っていることや、十分な研修プログラムを有していることなど、多くの基準をクリアする必要があります。

病院の役割分担が進むなか、救急医療や入院を伴う高度医療、高度かつ専門的な検査などを提供するという役割を担う病院のです。



薬剤師の業務に関する問題が二点。事務局長の田中はすぐに各ユニットに対し、「スケジュールを立てて、改善を進めてください」と指示を出した。

ほとんどの問題は軽微なものだったため、改善は順調に進んだ。しかし、薬剤師の業務に関する問題のうちのひとつ、「薬剤師の当直業務」に関しては、院内でも意見が分かれた。

今、全国的に病院薬剤師が不足しているといわれるなかで、馬場記念病院はもちろん基準に沿った薬剤師数は確保しているのだが、それでも当直体制がとれるほどの人数は整えていなかった。院内でも「薬剤師が当直までしなくても、業務の上では問題ない」という声が多かった。

病院機能評価機構の 相談窓口で求めた アドバイス

財団法人日本病院機能評価機構では、病院機能評価を受審する病院のために相談窓口を設け、アドバイスを行っている。田中はここに解決の糸口を求めることにした。窓口に向き、薬剤師の当直業務についてどうすべきかを相談したのである。

田中は、「当直を行うには、薬剤師数が充分でないこと」「業務上は

特に問題ないこと」などを正直に話した。窓口の担当者は熱心に話を聞き、真剣に考えてくれた。そして得たアドバイスは、こんなものだった。

「事情はよくわかります。将来、薬剤師数が充分確保されたときには当直を完全実施することを前提に、現状では、部分的な当直の導入とシフトの変更で、薬剤師が関与せずに薬が処方される時間を、できる限り減らす努力をしてはどうでしょう？」

窓口で行うのはあくまでアドバイスであり、実際の審査とは切り離されている。しかし、そのアドバイスは馬場記念病院の置かれた状況に合ったものであり、良いアイデアのように思われた。

そこで田中は、薬剤部のリーダーである野村浩子（薬剤部次長）とも相談し、現状を正確に把握することに力を尽くした。時間帯別・曜日別に薬の処方せんの発行枚数を調べ、薬剤師が勤務していない時間帯・曜日にどれほどの薬が処方されているかを洗い出していた。そして、数字に基づいた対策を立てた。

「調査の結果、たとえば土曜日には比較的多く薬が処方されていることがわかりました。そこで勤務シフトを変更し、土曜日に出勤する薬剤師の数を増やしたんです。また平日





にも遅出の勤務体制を新たに設け、夜10時まで薬剤師が病院に残る体制を整えました」(田中)

しかし、この改善を行った上で再度確認審査を受けてみると、答はノーだった。やはり当直が必要だというのだ。

これだけの対策を立てて臨んだ審査で認定が得られなかったのだから、田中もさぞがっかりしたに

違いない。しかし、彼女の口から弱音が聞かれることはなかった。なぜなら、「地域医療支援病院として、地域の方々の健康を預かる馬場記念病院が、認定病院の看板を降ろすことは絶対に避けなければならぬ」から。やるべきことは弱音を吐くことではない。認定が得られるまで、改善を続けることなのだ。

「どうする？」

「やるしかないでしょうね」

「そうよ、やるしかないのよ」

田中と薬剤部次長の野村はこんな短い会話を交わし、意思を確認し合うと、野村はすぐに薬剤師の当直勤務を導入する準備に取りかった。メンバーとよく話し合い、当直勤務を行うように説得したのだ。メンバーも状況はよく理解してくれたが、それでも事情があつて当直は難しいという者もいた。野村はメンバー内での業務内容を調整した。他部署の協力、理解もあり、何とか薬剤師の当直業務はスタートした。

「何といつても、患者さまへの対応が24時間できるようになったことが大きいですね。薬品管理の面でもよかつたと思います。看護部などからは、夜間に薬剤師がいてくれて安心という声を聞くと、うれしくもあります。日常業務に影響がないといえは嘘になります。しかしせっかく当直業務に取り組むのですから、そのメリットは生かしていきたいですね」

「ふと気づいたのです。私たちは一段上のステージに立っていることに」

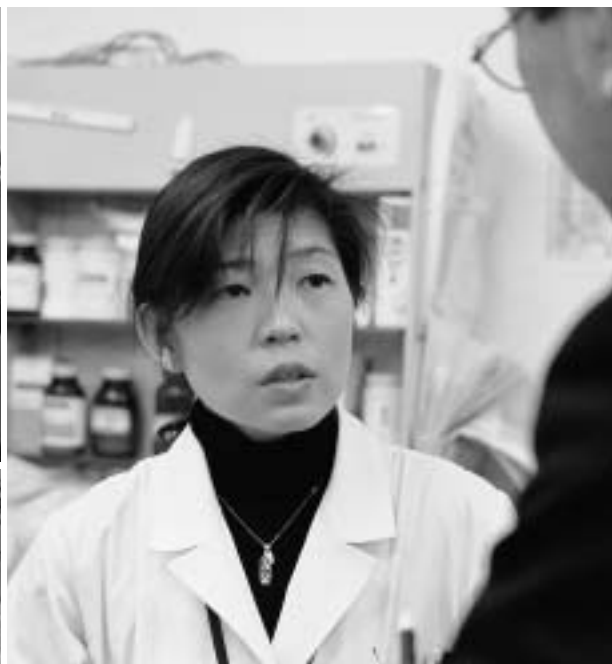
実は、薬剤師の当直業務に関して、病院機能評価を行う日本医療機能



能評価機構の判定に対して、異議を申し立てる声は院内に強かつた。院内では「現状でも問題はほとんどない」という見方が多かつたし、大阪府下の民間病院を見渡してみても、薬剤師の当直業務を行っている病院は、ほんの数カ所だったからだ。しかし、理事長の馬場はこんな話をしてくれた。

「ふと気づいたのです。私たちはもうすでに、一段上のステージに立っているということに」

一呼吸置いて、馬場は続ける。「訪問審査の際、サーベイヤーが、



『臨床研修指定病院なのですから』という言葉を何度も強調していたことを思い出したのです。臨床研修指定病院とは、次代の日本の医療を担う若い医師を育てるという、とても大きな責任を持った病院です。そんな病院が、『実務上は問題ないから』『他もやっていないから』という理由で、理想の医療を放棄していいはずがありません。他はどうであれ、私たちは、真摯な姿勢で理想の医療を追求するべきなのです」

結果報告書に刻まれた 重い「期待」の二文字

薬剤師の当直業務を最後に、すべての要改善点はクリアされ、馬場記念病院は病院機能評価の正式な認定更新を果たした。

認定証を手にした今、事務局長として改善活動をリードしてきた田中は改めて、「周囲の人々に支えられていることを実感した」と言う。

「職員はもちろん、窓口でアドバイスをくださった方をはじめとした日本病院機能評価機構の方々にも、ずいぶん助けられた認定更新だったと思います。特に評価機構の方々が馬場記念病院に寄せてくださる期待の大きさを痛感しました」

今、病院機能評価の結果報告とし

て、日本病院機能評価機構から届けられた分厚い冊子が、馬場記念病院に大切に保管されている。その冒頭に掲げられた「総括」の部分には、こんな一節が書かれている。

「貴院の総合力から勘案するならばさらなる改善が期待されるがゆえに、課題に関しては厳しく指摘させていただいた。評価所見を参考にし、さらに発展されるよう期待したい」

馬場記念病院の職員全員は、この言葉を深く胸に刻み込んでおくべき

だろう。報告書に記された「期待」の二文字は、日本病院機能評価機構からの期待ばかりではない。地域社会全体からの期待であるはずだから。

田中は言う。

「最初の認定取得から、今回の認定更新までの間に、馬場記念病院は地域医療支援病院、臨床研修指定病院、急性期特定病院という認定を取得してきました。今回の認定更新を終えて、特に地域医療支援病院や臨床研修指定病院に求められる、社会

からの期待の高さを実感できたと思います。地域医療支援病院や臨床研修指定病院という看板は、けっして飾りではありません。私たちにはそれにふさわしい高いレベルの、理想的といってもいい水準の医療を実現することが求められているのです」

「CQI（継続的な質の改善）の遺伝子を組織に埋め込むこと」

そして、田中は未来へと目を向ける。

「確かに今回の評価はかなり厳しいものだったと思います。しかし、たとえば薬剤部の一件のように、当院の弱点を改めて認識できたという点で、とても実り多いものだったと思います。5年後に再度、認定の更新を行う際には、さらに高いレベルを求められることでしょう。そのとき、けっして慌てることがないよう、これからも改善を継続していく必要があります。いえ、改善のスピードをさらに加速させ、CQI（継続的な質の改善）に取り組んでいかなければならないでしょう」

「CQI（継続的な質の改善）」の教科書を読んでもみると、その手法にはいくつかのポイントがあることがわかる。それは「第三者や経営トップが主導するのではなく、職場の当事者が継続的に改善活動を行うこと」「部門の壁を越え、全員参加の活動を

行うこと」「顧客志向（患者さま志向）であること」など。こうしたポイントは、今後、馬場記念病院が改善に取り組む上で必要なことも重なる。

最後に、理事長の馬場が語ってくれた、未来への決意表明を紹介しよう。

「社会が変化し、病院に求められるものが変わっていく以上、改善に終わりはありません。もし、そこにあってゴールを求めるとするならば、『CQI（継続的な質の改善）の遺伝子を、組織のなかに埋め込み、定着させる』ことといえるでしょう。それは、とても難しいことです。しかし、それは必ず達成しなければならぬ目標です。馬場記念病院は、地域医療支援病院であり、臨床研修指定病院です。それは他の模範となるべき病院であることを示しているのですから」





診療所は、患者さまを最適な医療へと導くための地域医療の最初の窓口

地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」となるのが診療所です。診療所では、訪れた患者さまに、丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。また診断の結果、より専門的な検査や入院治療が必要と判断した場合には、それを提供できる病院を、速やかに紹介することもその役割のひとつ。こうした「かかりつけ医」のさまざまな取り組みが、一人ひとりの患者さまを最適な医療へと導いているのです。特集Part2では、こうした診療所のいくつかを紹介していきます。ご登場いただく診療所と馬場記念病院は連携体制を取り、共に地域医療への貢献をめざしています。

※ 診療所は、アイウエオ順で紹介しております。

時

代の進歩に呼応して、医療技術のレベルアップを図っていくことが大切。

患者さま一人ひとりに
じっくり時間をかける。

無心になって、
患者さまと会話し
疾患を見極める。

開業11年めを迎える高安内科クリニック。高安健院長は、それまで25年間にわたり市立堺病院に勤務した後、「これからの人生を、地域の医療のために有効に使っていかう」と決断し、堺市の中心街に開業した。

高安内科クリニックでは高血圧、高脂血症、糖尿病などの慢性疾患を中心に、在宅診療にも積極的に取り組んでいる。診療のスタイルは、患者さま一人ひとりにじっくり時間をかけること。これは、病院に勤務していた頃か



ら変わらない院長のモットーだ。慢性疾患の場合、患者さまの背景、家族、仕事のことを把握するために、どうしても診察に時間がかかる。しかし、院長の場合、もう少し深い理由があるようだ。「患者さまのことを把握するのは、基本として大切です。むしろ、私

の場合は無心になって、患者さまの言うことを聞いて、様子を観察するんです。すると、心の問題とか家族の問題を含めて、今まで隠していたベールを通して、本当の疾患が見えてきます。そのために時間がかかるのです。外側に気を取られると、本当に悪いところは見えてきませんからね」という答え。

「じっくり話を聞いてくれる」院長に対して、患者さまの信望も厚い。堺病院の頃からずっと通ってこられる患者さまも含め、「分厚いカルテの患者さまが多いんです」と院長は笑う。

勉強会などを通じ、
つねに最新の医療を
吸収する。

開業当初は内科全般を幅広く網羅するつもりでいたが、医療レベルがどんどん向上するなか、「ひとりで全分野をやっていくのは無理だと気がついて、最近は循環器を中心にしようと、



高安内科クリニック

院長：高安 健

住所：大阪府堺市中之町西1丁1-10 堀ビル4階

TEL：072-229-5517

診療科：内科

方針を変えたところですよ」と院長は苦笑する。そして、院長ひとりでは手が回らない部分は、病院や他診療所や訪問看護との連携も積極的に活用している。「私が開業した当時と違い、病院サイドがオープンに情報公開してくれるようになりました。緊急時もすぐに対応してもらえ、診療所にとっていい時代になってきたと思う」という。たとえば、糖尿病の栄養指導については、馬場記念病院から栄養士を定期的に招いているそうだ。

扉を大きく開いて、地域の患者さまを迎える。

患

者さまのニーズにフレキシブルに応え、充実した医療サービスを提供する。

が、高安内科クリニックの診療レベルを高く維持していることは間違いがない。そのほか、院長は、地域の診療所が集まる勉強会も意欲的に開催してい

る。「互いに顔が見える関係を作り、診療連携を図っていきたい」というのが、狙い。つねに時代の動きをにらみながら、院長は着実に地域医療への貢献を果たしている。

病診連携体制を整え、患者さまに的確な医療を提供する。

JR津久野駅から徒歩1分程度の好立地にある、たなかクリニック。昭和42年、田中産婦人科として開院。平成14年、田中康志副院長が加わるのを機に、全面的に改装し、「たなかクリニック」と名称も一新した。

改装のポイントは「患者さまとスタッフの接点を考え、親しく受け応えできるように、受付をオープンカウンターにしたこと。また、バリアフリーにして、スタッフの動線にも配慮しました」と副院長は語る。明るい雰囲気のカリニックでは、現在、副院長の専門である整形外科を中心に、総合診療クリニックとして地域の患者さまを幅広く迎えている。

改装と同時に、副院長が最初に手が

患者さまのニーズに幅広く的確に応えていく。

もう一つ、副院長が診療を始めるにあたって打ち出した方針は、医師、患者さまと病院長の持論。さらに「患者さまをお預けしたら終わり、ではなく、診療所と病院が協力して、ひとりの患者さまを診ていきたい」と続けた。病診連携をしっかりと整えておけば、扉を大きく開いて、患者さまを受け入れられる。「あそこに行ったら、なんとかしてくれる」と思ってもらえる医院づくりが、副院長の目標だ。

また、副院長が診療を始めるにあたって打ち出した方針は、医師、患

者さま、スタッフ間の上下関係を一切取り払うことだった。「医師がえらいわけではなく、そういう役割を担っているだけ。患者さまと同じ目線で、親しいコミュニケーションを心がけています。暗い診療所より、笑いのある、明るい診療所の方がいいでしょう？」と気さくに笑う。

上下関係のないフレンドリーな雰囲気づくりは、院内の風通しを良くして、チーム医療を実践する上でも役立っている。たなかクリニックでは、患者さまのニーズに合わせて、医師、看護師、リハビリスタッフが協力してさまざまな治療法を駆使している。リハビリでは柔道整復師や鍼灸マッサージ師を揃え、ハリ、マッサージ治療も行っている。整形外科ではレーザー治療を用いているほか、辛い腰痛を訴える方には、神経根ブロックや硬膜外ブロック療法などを行う。さらに、局所麻酔でできる範囲の小手術も手がけているが、そ



のテクニックを維持するために、副院長は今も休診日に、大阪市内の病院で整形手術を行っている。「一開業医になると、どうしても整形内科になってしまう。整形外科という位置づけを忘れたくない、という思いもあります」と副院長は語る。充実した診療体制を整え、たなかクリニックは地域の患者さまのニーズに幅広く、的確にこたえている。



たなかクリニック

院長：田中悦男

副院長：田中康志

住所：大阪府堺市津久野町2-6-1

TEL：072-271-1825

診療科：整形外科、リウマチ科、リハビリテーション科、産婦人科、内科、小児科

プライマリーケアに徹するのが、地域に根ざした診療所の役割。

早期発見・早期治療を第一に掲げて。

親子三代にわたって診ているからこそ総合的に診断できる。

昭和26年、堺東にて開業した山田医院。昭和36年、この地に移転。平成15年より、山田全寛副院長が加わり、現在の診療体制が整った。

山田周作院長に診療のモットーをたずねると、「ずっと地域のプライマリーケアをやらせてもらっています」という明快な答え。山田医院のある御陵通は、耳原総合病院、堺山口病院、市立堺病院、馬場記念病院など大きな病院に囲まれている。「最初に病気を発



見して、適切な病院に紹介し、早期治療に結びつけています」と院長は語る。この取り組みは、病診連携という言葉がまだなかった、30年以上も前から始まったもの。プライマリーケアという概念が言われ始めた頃から、「早期発見・早期治療」を率先して行ってきた。

早期診断のために、心がけていることは「患者さまの生活状況などをよく把握すること」（院長）という。歴史ある山田医院では、親、子、孫まで三代の患者さまを診ているケースも多い。たとえば、家系で同じ病気の人がいたことから、診断に結びつくこともあるという。

山田医院に訪れる患者さまは、白癬、接触性皮膚炎などの皮膚疾患を中心に、高血圧、糖尿病などの生活習慣病まで幅広い。さらに昨年より副院長の夫人、山田摩利子先生による心療内科を週1回開いており、診療体制はいつでも充実した。その狙いについて、山田全寛副院長はこう語る。「病は気から」という言葉がありますが、精神的に落ち込めば、体調も崩しやすいんですね。ですから、嫁・姑の愚痴でもいいから、気軽に話しに来ていただきたい。そこから、病気が見つかることもありますから」。

ドクター同士が直接話せるような病診連携を。

病院の得意分野を把握し、疾患に応じて振り分けている山田医院。そのなかで、馬場記念病院には、脳外科を中心に紹介することが多い。「馬場記念病院さんにはとてもよくやってもらっています。情報もこまめに発信してくれるので役立ちますね」（副院長）と

評価する。

また、緊急時の対応については、院長自らが救急搬送された経験がある。昨年11月、院長は脳皮質下出血で倒れ、副院長の指示ですぐに馬場記念病院へ。倒れた時は左半身の不全麻痺だったが、その後の迅速な治療により、奇跡的に麻痺も残らず退院。患者さまから「本当は入院じゃなく、旅行にでも行っていたんじゃない？」と言われるほど、元気を回復した。「おかげさまで、九死に一生を得ました」と院長はおだやかに笑う。

今後の病診連携について、副院長は「ケースによって、ドクターと直接話してニュアンスを伝えたいときもあります。そんな時に、医師同士を結ぶホットラインのようなものがあると、いいですね」と期待を寄せる。病院との結びつきを強めることで、山田医院はプライマリーケアの役割を着実に実践しているこうとしている。



山田医院

院長：山田周作 副院長：山田全寛

住所：大阪府堺市御陵通1-8

TEL：072-233-1791

診療科：皮膚科、内科、心療内科

『つばさ』を発行して 今回で20号目を迎えます。

地域医療を考えるペガサス情報誌『つばさ』。

平成9年10月に創刊以来、今回で20号目の発行となりました。

この『つばさ』を通して、私たちペガサスは、皆さまに

何をお伝えしたかったのか。20号目の今、振り返りたいと思います。

まずは知っていただき、
そしてともに考えたい。

『つばさ』を創刊した平成9年は、地域医療の仕組みが目に見えて大きく変わろうとしていた時期であり、また、ペガサスも独自の方針をもとに、カバーする医療領域を広げ、それまでとは異なる姿になりつつあった頃でした。

これから地域医療はどのように変わるのか、そのなかで、ペガサスはどのような医療を提供していくかとしているのか。その両方のありのままの姿を、皆さまに知っていただきたい。そして問題点や課題を、私たちと一緒に考えていただきたい。そんな願いから、ペガサスは『つばさ』を創刊しました。

カタチ、水準、思い。
描いたのは実際の姿。

『つばさ』では、まず第一巻で、今後、

地域で提供される医療を領域ごとに取り上げました。第二巻は、第三者による病院評価、診療所と病院による新しい関係など、従来とは一線を引く新しい医療、病院の姿をクローズアップ。続いて第三巻では、診療科にスポットを当て、救急病院、急性期病院が現在、どこまでの医療を提供できるのかを紹介しました。

こうした医療の本質とは異なり、病院の側面を描いたのが第四巻。皆さまに、地域の医療ネットワークを賢く上手にご利用いただけるよう、病院の機能のいくつかをお見せしました。また、第四巻の4号では、馬場記念病院が地域医療支援病院、急性期特定病院に認定されたことをご報告しています。

そして第五巻は、馬場記念病院が担った地域医療支援病院とは何か？のシリーズ。これまでと変わった点、変わらない点をお伝えし、馬場記念病院の使命を、さらには、地域医療の全容をご理解いただくためでした。

今までも、これからも。
この町の一員として。

いずれの号においても、ペガサス職員をはじめ、地域の医療人の活動を通して、その実際をご紹介することにこだわってきました。なぜなら、医療を提供する側も、また医療を受ける側も、この町の人々。両者が一緒になって考え続けることが、この町の医療をより良くする源であると考えたからです。

今後、地域の医療はさらに変化を遂げていきます。その変化をどう受けとめ、より快適、より健康的な生活に結びつけていくか。ペガサスは『つばさ』を通して、この町の「あなた」とともに、問い続けていきたいと思っています。



つばさ 20
2005年秋号
平成17年10月発行
第5巻第5号（通巻20号）
地域医療を考えるペガサス情報誌

特集

Part 1 二度目の病院機能評価

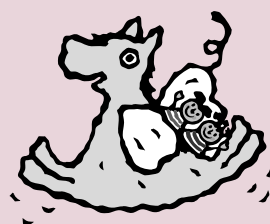
Part 2 地域医療に取り組む診療所

※ 記事の制作にあたり、患者さまや診療所の先生方にご協力いただき、心から御礼申し上げます。

発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 情報誌編集グループ
編集協力 HIPコーポレーション
発行 医療法人ペガサス

〒592-8555 大阪府堺市浜寺船尾町東4-244 TEL 072-265-5558

本誌は再生紙100%を使用しています。





医療法人 ペガサス

馬場記念病院が一回目の病院機能評価を受審した際、私たちは、医療の質とは、病院だけが問われるのではなく、すべての医療人に問われることであると気づきました。

つまり、医療人一人ひとりが、より良い医療とは何かを常に考え、日々の活動において常に改善を続けてこそ、

医療の質、そして病院の質が向上することです。

以来、継続的な質の改善＝CQIを、病院内に根付かせることに、職員一同、努力を重ねてきました。

一年、二年、三年… 一日一日の繰り返しによって、CQIのサイクルは回りはじめてきたように思いました。

しかし、まだ完全に回りに回っているわけではない。

それを気づかせてくれたのが、今回の病院機能評価受審です。

馬場記念病院は、地域医療支援病院であり、臨床研修指定病院である。

だからこそ、もっと高次元でのCQIが必要であることを、

より自覚し、意識し続けなければならない。

評価結果、限定認定、そして正式な認定という一連の流れを通して、

私たちは、自らに求められているレベルの高さを、

改めて認識したのです。

地域医療の核となる急性期病院として、

馬場記念病院がさまざまな認定を受けることができたのは、

職員の、医療人としての、日々の努力です。

その職員の地域医療に対する「思い」と「行動」を大切に、

継続的な質の改善という遺伝子を、

組織に埋め込み、定着させるまで、

私たちはさらなる努力を続けていきます。

医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦